のか？　されど時代は進む。故に吾等は出藍たらねばならない。「心滿る處に進歩無し」と言ふ金言に僕はやうやう一條の光明を見出した。さうだ向は遠い速く歩まねばならない。あの光の發する處に人類の最大目的が潜んで居なければならない。だが如何にせん途の遠きに疲勞を感じ、光に照された自分があまりに痞せおとろへたるを見て再び落膽せずには居られない。

成せば成る成さねば成らぬ何事も……さうだ過去を問ふ勿れ、各自持つて生れた天分を以つて目指す前途に全精力を集中して、人生目的のゴールへ進軍を起さうではないか。

絲瓜の下で見た夢

第五學年　良泉　堯仁

（一）

吾輩も亦猫である。

名は「ライト」と云ふ。吾輩は命名されて以來「ライト」と云ふ名前の意義が知りたかつた。飛行機創製者「ライト」氏の名が夙に人口に膾炙して居る事を熟聞して居た吾輩は、それかとも思つて見た。しかし實際はそんな世界的な名前では無い事が分つた。

それは命名されてしばらくたつたこの夏の或る日の事だつた。主人の一親友が、訪問して來た。主人と言つても吾輩の主人は中學生の坊ちやんである。可成り強い近眼で、ロイド眼鏡をかけてゐる。訪づれて來た御客も矢張り中學生である。吾輩の主人も隨分武骨な方だが、これは亦思ひ切つた顏の黑い頑丈な大將である。物すごい眼をして顏中一杯に黑豆の樣なものがついてゐる。多分「ニキビ」と云ふものだらう。

「ヤー」「ヤー」これが主人と黑豆君との挨拶の全部である。吾輩の「ニヤー」と云ふのと格別の差がない。やがて二人は中學生らしいノンセンスな談笑を始める。いつしか吾輩の事が話題にのぼる。吾輩は主人の膝の上で甚五郎の彫刻猫の樣におとなしく坐つてゐた。けれども談偶々吾輩の事たる以上吾輩は日光の眠猫の樣に無關心に眠つては居られない。

「名前は何と言ふのかい？」と黑豆が尋ぬた。吾輩は急に耳を欹てた。主人は吾輩の脊中を撫で乍ら、誇らしげに、

「ライトと云ふのだ。」と答へた。

「何？ライト？」黑豆は首をかしげて手を拱ぬいた。頭の中で英和辭書の頁を繰り始めたらしい。

「ライト、レフト、まさか『右』といふのでもなからう？」

「うん。」

「ライト？」無論『お輕る』と言ふのでもなからうし」と黑豆は、首を傾けては「ライト」「ライト」と獨語しながら頭の辭書を繰つてゐるが、どうも黑豆君も毛唐の言葉についての知識は吾輩の主人と伯仲を爭ふ程度の貧弱さである事を、吾輩は圖らずもこの機會でテストする事が出來た。やつとしてから、

「君、それは『正義』といふのだらう」と黑豆君はこれこそと言はぬ許りの自信に輝いた目付で主人の顏を見た。主人は赤い頰をゆるがせた。

「アハハ……、こんな小さな動物に『正義』なんかと言ふ名は少し度はずれだね。『光』と言ふ意味なのさ」と主人は不相變脊中を撫でゝゐる。吾輩は「こんな小さな動物」とけいべつされて、主人の柔かい手に爪を掛け樣としたが、その途端に黑豆君が、「そうか『光』といふのか。素適だね。いかにも溫和しさうな上品な高尙な猫に想はれるね。」と言つた。それで吾輩は將に逆臣たらんとしたが、この黑豆君の言葉によつて風雨來らんとする危機は去つて、又元の溫和しい彫刻にすまし返る事が出來た。猫黑豆君はその名前の基因を調査したいらしい。

「何故そんな名を付けたのだい？」と尋ねる。主人は鼻すじから口元へ撫でゝ與れた。氣持が良い。眼瞼が自然と閉ぢて來る。

「それはね。猫の目は、夜になると光るだらう。あの暗闇に光つてゐる眼が、丁度星のまばたく光りを聯想せしめる。星の光りには詩もあり歌もある。もつと言へば宇宙の秘奧を啓示する靈光がある。あらゆる苦惱も享樂も調和しつくし、淋しさも賑やかさも溶け合つてゐる。だからコイツの名前に「ライト」としたのだ。しかし君此奴の毛色はどうだい。御覽の通り一點の美もないだらう。茶色でもない、黑でもない、灰色でもない。きたない馬賊の服裝をでも聯想させる色だらう。全く愛想がつきるね。」主人は吾輩の面前で酷評を下しながら、相變らず美のない馬賊の脊中を撫でゝゐる。が吾輩は今度はもう堪らない。激憤、柳眉を逆だて、將に恨を晴らさんとしたが「溫和しい上品な名前」を反省して、ガンヂー氏の所謂無抵抗主義に忍從し、彫刻の美を害せない事を念とする

より仕方がなかつた。

「でもね君。」と主人は猶言葉を續ける。

「でもね君、こいつの持つてゐる全体の柔かい曲線美に到つては、それは猫獨特のもので、人間仲間ではとても見出す事の出來ない所だね。」と主人は、今度は左記の酷評にも似ず吾輩に多分の讃辭を惜しみなく呈して藝術家らしいすまし方をする。かしこまつて聞いてゐた黑豆君は、如何にもと言つた鹽梅で、澁茶を一啜して頻りに吾輩を觀賞して居る。吾輩も亦黑豆君のよごれた洋服と舊式の大きな腕時計とを眺め返してやつた。吾輩の毛色が馬賊の服裝なら、黑豆や主人の服裝はまさに西藏の山奥の失業者を聯想させるものだ。

「ライト、光、星、詩的だね。實際君の好みの名前だ。」と客はおべつかにしても大分感心してゐる樣だ。主人も得意滿面である。吾輩はこの武骨な主人がよくもこんな詩的な名前を考へついたものだと一寸感心してつかはしてもよいと思つた。だが一般に學生といふ動物は、名前を考へ出す特別の機會と心境を惠まれてゐる樣だ。これについての吾輩の研究の結果を發表して見やう。

× × ×

× × ×

× × ×

吾輩が鋭意研究の發表をして居る事には、主人は無頓着の樣に立ち上つた。そして吾輩をムサンコに危險狀態に抱きながら本箱から一冊のノートを取り出して客に見せる。

「何だ詩集かね」と黑豆君。

「いや俳句のかきなぐりだ。愚作集だよ。」と主人はブツキラボーに謙遜する。

「こりや何だい、君の俳號かね。何と云ふのだい。」と黑豆は表紙の下の方の文字を指ざす。

「わらびと云ふのさ。紫微てね余り好い名ぢやないけれど」成程、吾輩の「ライト」に比すると實際見劣りはあるが、けれども「わらび」と言ふものには、さすがに捨てがたい俳味があると同感して置かう。

「『萩の花白く浮き出る星月夜』成程詩趣百パーセントだね」と黑豆が云ふけれど、まだ〳〵覺束ない。

「月今宵おそしと椽で脊伸びする」大分佳境に入るぞと思ふた。果たして、

「いゝ句ですな。僕輩如きものにはとても出來ない句です」

と黑豆君がひやかす。吾輩もおかしくなつて吹き出したくなつたが、主人に叱られるのを恐れて「ニヤーン」と一語を長く引いて、やつと謹聽の態度を保つ事が出來た。

「あくびして小猫椽から立ちにけり」

「ハハハ……、とう〳〵出ましたね、ライト君でせう。」と吾輩を見て二人で笑つてゐる。俳句もこゝまで墮落すると却つて愛嬌が出て來る。正にこれ川柳と俳句との綜合された尖端的新藝術だ。矢張り吾輩の主人の藝術的天分、創造的奇才は全く敬服の外はない。次はどんな傑作かと大きな期待を以て聞いて居ると、黑豆君は始めからクス〳〵笑ひながら、

「今日も亦あくびで暮す小猫かな」

「ホウ又猫ですね。そんなに猫はあくびをしますか」と聞くから「それでも人間程澤山はやらない」と吾輩横槍を入れたが勿論二人には通じない。

「君も猫を飼つたら分るだらうが、春から夏へかけては猫のあくびはひつきりなしだぜ。行儀作法もないね」といつの間にやら俳句から、問題は吾輩のあくびに轉化して居る。そして不相變主人は吾輩を不作法者にして居る。主人は客人の前では決して吾輩の事を賞めない。全体人間仲間のやる事は、譯が判らぬ事が多い。人間達は自分の最愛の息子でも、愚息なんかと言ふ。人の子たるものを豚兒と言ふ。時には坊主とも、うちの餓鬼などと言ふ。それ程に僞はりの謙遜をして世渡りをする不思議極まる世界だ。吾輩から見ると實に氣の毒な生活だと人間達が可哀想に思はれる。

大分時間もたつて西の空は入日で眞赤に燒けてゐる。客は歸り仕度をし始めた。吾輩も「ニヤーン」と一聲挨拶をして主人に抱かれながら玄關口まで見送りに出た。客は編上げ靴をはくのに大分手間どつてゐる。人間の足と云ふ物は厄介なものだと思ふ。吾輩の足とは、到つて不經濟で、不便利なものだ。吾輩の樣に素足で歩く訓練をしたらいゝのに。人間のノンセンスが愈々不思議で、不憫である。何故もつと生活を經濟的に合理化せないのだらう。

「また來て呉れ給へ。」と主人は黑豆の後姿に言葉をかけた。黑豆は不細工なお尻をあげてうつむいた儘禮を言つて居る。

「サンキユー、プリーズ、ユーも來て呉れ給へ。ウイズ、ザキヤツト、ではライト君にもよろしく。」と吾輩にまで愛嬌をする積か、閻魔さんが、ほゝ笑んだ樣な可愛らしい微笑を殘して歸つてしまつた。その最後の日英混合語に至つては、何

の事だかさつぱり判らない。人間の言葉の多いのにはあきれる。人間は勝手に澤山な言葉をつくつて、それを覺えるのに迷惑してゐるらしい。吾輩の主人も明らかにその一員である。何故吾輩の猫語を採用しないのだらうか。

「ニヤー」の一語で千態萬樣の一切の機會に應ずる意味深長なものだ。そして猫語には日英米獨佛等と國境がない。

主人は吾輩を投げやつた儘一人で書齋に引籠つた。吾輩仕方なく庭を散歩する。だん〳〵と夜の帷りが黑くなつて、夕顏の花蔭に團扇が二つ三つ動いて話聲が聞える。立ち聞き仕樣かとも思つたが、腹が空いて來たので、食堂の方へ温和しい歩を運んだ。

（二）

朝の靜寂を破る鷄の聲と、黑き帷を押し除ける旭日の光りとで、夜は明け始めた。昧爽の美景は、雲烟過眼するだに、壯を味はひ、快をむさぼる。見得を切りつゝ太陽は、群雲居並らぶ大空を、光の王者たる威嚴を輝かし乍ら、雄大に應揚にさし昇る。地上に存する萬物に笑を含んで温かい慈愛の光を投げる。萬物は始めて目醒めた。

吾輩は露で濡れた屋根に上つて、希望と元氣とを以て清澄の朝の空氣の香を胸一杯に吸ひ込んだ。その吸ふた元氣で、主人の寢室に飛び下りて、主人を呼び起した。しかし丁寧に言つた。何故なら、中學五年生と言へば、生意氣で、短氣で亂暴だから。

「御主人樣、早くお起き遊ばせ。何と此の世の朝は美しい景色ですこと。早く起きて御覽なさい。冷え切つた無花果のおいしい味をお忘れなされたか。布團との交際は止めて、朝の空氣と面會しなさい」

やがて主人が起きて來た。眼鏡をかけてゐない寢とぼけた主人の顏は奇態そのものであつた。獨り笑はざるを得なかつた。近眼ではれた細い眼。低い鼻。長い不衞生的な頭髮。だらしない寢衣の着方。脚線美貧弱な二本の脛。すべてが皆、人間らしい美を欠いてゐる。全く愛想が盡きる。一寸茲で昨日の酷評の仇討をして置く。

それでもパンツ一つになつて、冷水摩擦をしてゐる所は、多くの不完全さを補ふに十分な青年味が、痞せた身体に覗かれた。冷水摩擦が濟むとラヂオ体操、國民保健体操とも言はれてゐるさうだ。しかし主人の動作は到つて不活潑である。採點するなら、甘く見て六十點位。又その順序も小學校に通つ

てゐる三年生の弟の方が餘程正確らしい。弟ぼんちはそれを見ながら笑つて居る。空論家的主人は、ラヂオ体操の効果を十分知らないらしい。人からラジオ体操と思はれたら、それがラヂオ体操の目的だと考へてゐるのかも知れぬ。しかしそんなにまで愚人でもあるまいとひいき目で見てやる。赤くなつた皮膚を平手でポン〳〵とたゝいてゐる。鍛錬してゐる積らしい。總べてがすむと盆栽のばらに水をやつてゐる。主人にとつては自慢の盆栽だ。しかしいくらひいき目で見てやつた所で、それは遂に凡栽に過ぎないものだ。主人は腰を不格好に曲げて鼻をひつゝけて、その香をかぐのが癖である。吾輩の鼻などとは同日の論でない。しかし鼻の感覺の强いのは原始動物に多いと言ふ事を何時やら聞いて以來、鼻の自慢は止めてゐる。兎に角何事にせよ。自慢して結果の善い事が出るのは稀である。

主人は盆栽にしても、一枚の畫をかくにしても、手工をしても、主人のいとこのK君程器用でない。氣の毒な程不器用である。それでも自分では萬事に味得してゐる積らしい。主人は、「趣味でやつてゐるのだから、無論器用でなくともよいのだ。趣味の快感を味はんが爲に行つてゐるのだ。」なんかとすましてゐるが、結局は野狐禪的である。

七時半頃になると主人は、ゲートル捲いて、靴の音も勇ましく第二號君と二人で登校する。小學校行の茶目第三號はとつくに登校してゐる。三人とも學校へ行つて仕舞ふと淋しい。吾と事を共にする者は無い。それで隣の鹽物屋へ行く事に決めて置く。其所のおかみさんは、何時も店の箱から屑にしんをつまみ出して與れる。御馳走だ。二匹與れる事は稀である。そんな日は雨が降るかも知れないぞと心配したものだつた。おかみさんは氣の好い人ではあるが、店が忙しいのと澤山の子持であるので、多少神經質になつて居る。五人の子供が、毎日交替にお目玉を頂戴してゐる。屋根の上で日向ぼつこをしてゐる時等、おかみさんのかん高い聲と、子供の泣聲とが喧しい交響樂になつてひゞいて來る。元來が音樂狂の吾輩もこの音樂は閉口する。

「猫や犬は子を產むと神經質になつて困る」何時かも、裏の泣半爺が例の泣聲で言つてゐた。しかしこれも人間の一種の自惚である。人間でも子供が出來ると、鹽物屋のおかみさんの樣になる。「吾等の生活戰線には異狀あり」とか「吾等農民の負擔を輕減せよ」などゝ、すぐに神經過敏になる。

その日は、おかみさんは不在中で子供が騒いでゐた。道理でおかみさんのかん高い聲が聞こえない筈だ。吾輩が行くといきなり男の子が、吾輩の首すぢを引つかんだ。子供達のよいおもちやである。吾輩は、何か子供を喜ばす事はないかと考へた。あるある！　隣の嫁入りの時に禿げ頭のおぢいさんが「どぜうすくひ」をやつたのを見て置いた。大變面白いおどりだ。江州踊りよりは、餘程興味がある。早速實行してやらうと意氣込んで後足で一寸起ち上つた。子供達は不思議相に眺める。それから前足を右に振つたり、左に下げたり、眼が廻る程頭をくる〳〵と廻轉させたり、尾を三重に捲き上げたり、脊中をたゝいたりした。子供はだん〳〵興味づいて笑ひこける。それに調子づいて、人間の紳士がする樣に髭を撫でたりしてやる。吾輩もどつちが右か左か分らぬ程四本の足をかはる〴〵不規則に、跳ねたり、躍つたり、時には脊中に埃がつく程ころがつた時があつた。四つの顏がひつきりなしに吾輩の踊りと一緒に笑より笑へと變化して行く。息切る間も無いかの樣に、續けさまに笑ふ。虫齒だらけの口を開いて、えくぼを出したり、引込めたり、日に燒けた頰を運動さしてゐる。女の子は顏が白くて可愛らしいのが普通であるのに、こゝの女の子だけは、赤銅色の男の樣である。嫁入りの時に鏡を見たら泣くかも知れない。心配しながら、踊つてゐた。片足をあげて首を振り上げた途端「アツ」と言ふ間にすべりこけた。子供の捨てたバナヽの皮をふんだのだ。笑ひ續けて居た子供は、暫らく笑ふのを止めたが、吾輩のしかみ顏を見て驚く樣な聲をあげて笑つた。

「ハハハツ……、ヒツヒツ……」そこには、男の子の笑も女の子の笑も、區別出來ない程混合しきつた笑が爆發して居た。腹をかゝへて頭の毛を我武者にして、笑つてゐる。吾輩は脊中が痛いので一休みだ。女の兒がにしんを一匹ぼつて呉れた。きつと吾輩の踊が姫樣達のお氣に召したと見える。吾輩は、お禮をして御前を退がり、大事に「にしん」を食はへて歸つて來た。日當りの良い所で悠々として殘らず食つて仕舞つた。夏も終りになつて涼しい秋風が吹く。腹をふくらして夕方の村園を散歩と氣取つて見た。石垣を飛び越へて隣の車屋さんの畑を、丁度芽を出し始めた大根を、さけながら歩く。西の空は夕燒だ。沈み行く夕日。それを見送くる雲。赤、黄、青色とり〴〵に飾られてはいるが、その美の中に太陽と雲との離別の悲しみが光つてゐる。吾輩の馬賊の服裝もすつかり赤く

染められて我ながら見惚れた。美しいなあ。あれはルビーだ。そしてあの雲は黄金だ。あすこの雲は銀塊だ。あの山はサフアイアーだ。何と云ふ大きな寶玉の山だらう。天然の寶鑛だ。「あれが俺の物だつたら。」と吾輩は思はず首を上げた。「コツン」吾輩は頭に何かさはつて驚いた。大き絲瓜が「ノンセンスな事を考へるな。貴樣はもつとたしかな考へをもつて生活しろ。餘計な事を考へるな。人間を見ればよく判るだらう。あいつ等人間はあくせくとして、少しも落付かずに、利已的な事許り考へてゐる。だからいつも、喧嘩をしたり、警察官を手古擦らせてゐるのだ。基本を固くして置かないからだ。基本とは即ち心だ。人間は政治家にしても教育家にしても、根本を誤つてゐるのなのだ。これからの日本人は、氣の毒な程狹く感ぜられるだらう、俺はさう思へるよ。だから心を固くして、自分で働く奴が出世するのだ。今の青年はローマンチツクでノンセンスの事許り考へて居る樣だ」と、悠々として風に振られて居た。吾輩も、今までの吾輩が何だか絲瓜に濟まぬ樣な氣がする。主人も、未だ絲瓜の下で夢を見てゐる。もう直ぐ吾輩の樣に氣付いて呉れる樣にと心ひそかに祈つた。

お寺の鐘樓からは、物寂びた鐘の音がひゞいて來る。吾輩は默々として歸路についた。「絲瓜は偉い奴だ。悠長にしてゐるが悟つてゐるのだ。絲瓜は俺の夢を醒まして呉れた。有難う。吾輩の主人の夢も、日本全青年の夢も早く醒ましてやつて呉れ。あの人達が可哀想だ。」

野球

第四學年　木野戸勝造

投手がプレートを踏んだ。觀衆のざわめきがぴたと止んだ。一壘手がミットを一つ叩いて身構へた。ボツクスに立つた打者は獲物を狙ふ樣に投手を睨んだ。「ボール」アンパイヤはかう叫んだ。敵の應援團はわつと聲を上げた。その聲、わあつあつと叫ぶ聲は天地が破れる樣である。こんなに騒がれても投手の態度には驚いた。應援團の大聲が砲聲なら投手は、軍艦上の大將軍のやうである。二ストライク——三ボール。最後の一球だ。固唾を呑んだ觀衆の眼は投手の手許に釘附けにされた。眞に息詰る樣な沈默の一瞬！　靜かにモーションを起した。投手は走者に注意し乍ら全力を傾倒して投げた。カーン

と快音を立てゝ熱球は外野の彼方へ飛んだ。沈默は破れた。歡呼、亂舞、熱狂、騷然とした中に、グランドを駈ける選手の姿が蓄音機のレコードが廻轉しだした樣に動き出した。到頭走者が二壘に據つた。五回の裏である。敵方の應援團が夢中になつて騷ぐ。赤、青、白等の色とりどりの旗が空に躍る。投手の顏はみるみる間にひきしまつて來た。「落ちついて、落ちついて……」主將のショートが駈けよつて慰める。投手は頷いて球を投げた。高かつた。「ボール」審判(アンパイア)の聲に一壘側が又騷ぎ出した。「ボールピツチヤ」「ピツチヤボール」投手はほつと溜息をついた。「オンリイワンボール」三壘手が快活に叫んだ。「平氣々々しつかり行け」捕手の聲に全員は勢づいてグローブを叩いた。突然「どうなつたら勝つんですか」と隣席の中年の百姓らしい男が問うた。『なんだい！ どんなものか知らないで野球を見に來る者があるか』かう思つたがさて、何と言つて敎へたらいゝのか、と當惑顏で、それでもボールから目を離さずに居ると「え？」と催促する。困つて居ると後で誰かが「なあに。兎に角あの棒で球を叩いて飛ばすんだね。そしてその球より早くあの座ぶとんを踏んで球を着けられずに歸つて來りやいゝんですよ」と言つた。「なある程」と男は大層感心して居た。なか〳〵要領を得た答だと思つて微笑した。こんな呑氣な人も居る。回は回を追うて進んで行く。皆は手に汗を握る。たが空には勝負に無關係な鳶が輪をかいて居る。太陽がひとしきり觀衆を照らし始めた。

惜別

第四學年　古川傳三郎

たそがれ時だつた。

軟かな五月の空氣の中で、暫らく私はステーションの角にたゝずんで暮れ行く空を眺めてゐた。

淋しい思ひで！

間もなくして澤山の人々が、どの人も〳〵一樣の哀愁に抱かれて默してゐるのに氣がついた。そうだつた。そうした人々にとりまかれて、N君が私を見て微笑んだ。私はその時の彼の顏があり〳〵と思出される。

あの時彼は笑つてゐた。ほがらかに笑つてゐた。

彼はその一笑の中に、あらゆる離別の悲しさを味はつてゐたのだ。そうしてそれを打消してゐたのだ。

「まあ俺は行つて來るよ、達者で下れよ、便りをして下れ。」

彼は私にそう云つた。その言葉の中に彼は心の全部を表現してゐた。嗚呼！哀れにも、その友の瞳は輝いてゐた。そして夕日に光つてゐた。

「ではさようなら……」

私は全身の力をしぼつて、そう云つた。それだけしか云へなかつた。

彼は沈默の中に私の手を握つて、私の側を離れました。彼はけなげなにも見送りの人々に叮嚀に別れを告げてゐました。おゝ幸福なれよ。彼よ健全であれ。私はそう祈らずにはいられなかつた。

又その反面には彼の渡米を羨ますにはゐられなかつた。碧い太平洋の波路を輕々と渡り行く巨船が私の目の前にちらつきました。そうして異國！ そこには自分が夢路の中に遊んだ。麗はしい天地自然がパツと自分の眼前に展開されるかも知れない。一切は未知だ。開かれる秘密の國！

私はそれを湖國のステーションで空想してゐるのでした。彼は行くのだ何故俺は行けないのだ。何時の日か必つと行くぞ。行つて彼の未知の國を……。

そうした憧れは私の旅行癖を益々そゝり立てるのでした。

× × × ×

東京行の列車が爆音と共に入つて來た。最後に彼の手を握つた。

「では失敬」「では……」そして彼は列車の人となつた。

ホワイトのハンカチが見へる私も一生懸命我れを忘れて振つてやつた。レールの彼方にハンカチが消る迄……(完)

兵營の朝

第四學年　村川文男

「タタタター、タタタター」斷然男性的な喇叭の響が窓を洩れた。初めての兵營の夜を、身動きの出來ぬ寢臺に、寢ることよりも、疲れることしか、覺えなかつた自分は、朝をどんなにか待ちこがれた。

「コツ、コツ」不寢番の兵士の靴音が近づく。うす暗い廊下の電燈の光の中に、兵士の休が動く。「パチ」電燈を灯して、

寢樣をなほして歩いてゐるらしい。寢られない目をむりに塞いて、僕は樣子を窺がつてゐた。「コト〳〵」今先僕の落したまくらを拾つて呉れた。たぬき寢の數分。「パチ」消燈して次の室に移つた。まだ早いらしいもう一寢入りと、うとうとしてゐる時だつた。

「起床、起きんか」不寢番の兵士が報せに來た。「ワアー」直ぐ洋服を着た。靴下を履く、帽子帽子とまごつきながら所定の中隊の前に整列した。最早兵士達は竝んで、番號を附けてゐる。そろばんをはじく樣なそのすばやさ、ゴムにはじく水の樣な。その呼稱。次は僕達へ「番號」班長の號令は飛ぶ球より早い。「一二三四……五」「もとーい」「一二三四……五」

「よーし」「上衣を取れ」かくして、ひとしきり体操をした。東の空はいよ〳〵白んで、南の高い山は、はつきり見えて來た。フレッシュな朝の景色の中に、各中隊に宿泊してゐる。中學生の白い姿が、兵士の間にちら〳〵混る。僕等は部屋の掃除に掛つた。兵士は銃劍の稽古だ。「やー」「よー」元氣のよい氣合の響きよろしく、兵營のふんいきの中で、百パーセントの快味を覺へた。「食器を出せ」「炊事係飯をくばれ」總ては、伍長の指圖に依る。而して朝飯の食卓を圍んだ。「此の位よそうんだ」「わあー」僕達は聞く事々が、滑稽で仕方がない。七分三分の麥飯を、お佛供さんの樣に盛る。「汁は此のいれ物だ」淺いひらたい食器にI君汁を入れる。T君漬物をくばる。昨晩飯を取つた他何も食べて居らぬ。腹は此の飯で、充分に滿足を買ひ得た。唯無上にうまかつた。「おそいそれでは、戰の間に合はん」伍長は言ふ。いそいで〳〵忙しい朝飯はすんだ。そして銃を掃除しながら、朝の教練を待つた。

教練の汗から

第三學年　竹内一

「前へーおい」「全隊ー止れ」「前へー」「駈足ー」

「一線疎開、右より第一第二第三第四分隊、第二分隊基準分隊の目標――……開け！」

炎熱燒くが如き時、

寒風裂くが如き時、

號令、號令、汗、々。帽子の中に脇の下に尊い汗が流れ出る。男兒而して第二の國民はこの汗を何と見るか。

教室で叱られて出る冷汗。

教練の時流れる玉の如き汗。

野球だ味方は受け氣味だ！その時の汗。

風呂場で洗ひ流す一日中の汗。

それらは總て自分の過去の動作の名殘りである。記念物である。故に我々は汗に學ばねばならぬことも多くあらうが、また、敢然と昨日の汗を洗ひ落して今日の新らしい汗を作らなければならない。

その意味に於いて教練の汗は最も意義ある汗を出さしてくれると思ふ。

諸君よ、諸君は教練から何を自覺するか。

帝國館

第三學年　竹内一

父は同町内であるが故に何度も帝國館へ行つた。しかし僕はその滋賀縣第一だと言はれる帝國館へある嫌惡をさへ感じてゐた。それは映畫館等に立ち入ることを禁じられてゐる生徒の僻みであつたのかも知れない。同じ映畫館でもずつと遠い○○館をその新築されて其後大入であると言ふ噂だけで、帝國館に復讐したやうに思つた。

× × ×

夏中で田舍から僕の家へ來た人が五六人あつた。叔母は小學校のやんちやを二人つれて來て一晩宿つた。そして柄にもない映畫を見ようと言ふのだ。

帝國館はその時(大忠臣藏)をやつてゐた。僕は忘れたがその時○○館はもう一寸氣のきいたものをやつてゐただらうと思ふ。叔母はその(大忠臣藏)のビラの大きさから推量してすばらしいものに違ひないと信じてゐた。

りようりようたる音樂がついそこの帝國館から、叔母の心を、表の人を、夏中に集つた總ての人を「早く〻〻」と呼びたてた。僕の母が一生懸命つくつた夕食をうのみにして叔母はその夜出かけて行つた。

暑さのため僕は寢られなかつた。叔母が出て一時間程すると、猛然、久しぶりの夕立が來た。ものすごい勢ひで雨が大地を叩き廻る音。帝國館から聞える音樂。これらを僕は遠い夢のやうに聞いてゐた。今宵、夏中とて浮かれて外出し雨に

逢ひぼうぼうの体で家に逃げ込む人々。雨に降られて仕方なく帝國館へ入る人々。帝國館のすしずめ。僕はそんなことを想像した。少時雨が止むと、むん〳〵とする暑氣が家の中に流れ込んだ。帝國館の連中が――その中に叔母の顏もある――汗を流して一度入つたのだから終りまで見なければ損だと言つた顏で見てゐるだらうと思つた。

× × ×

「××××××××××。子供は何が何やらわからずにしよつ中色んな事を聞くので弱つてしまひました。人は半分位しか入つてないんで、二階なんか少ないもんでした。」

ふと眼が覺めた。叔母は向ふの部屋で誰かに、昨夜の報告をしてゐる、叔母は柄にもない「階上」をはりこんだのだ。

そして叔母は今迄に雜誌で、教科書で、講談本で讀んだ、忠臣藏――それに昨夜又記憶を新しくした四十七士の話を喋り出した。

僕は自分で眼を覺したいと思つて又寢た。だが叔母の（大忠臣藏）は、僕をどうしても眠らしておかない程、魅力！があつた。

（今思つてみると帝國館が八月一日から盆前興業として、何やらのトオキイをやる筈で止めて終つて數日間「休館」してしまつたのは本當だ。叔母がもしトオキイを解するならば必ずやつて來たであらう。そして「當分休館」の立看板に――ファンの（叔母もその一人であるかも知れない）失望を見出したかも知れない。だが叔母はもう前の大×××で滿足して來ない。だから、叔母は圓滿なる帝國館ファンである――）

× × ×

起きて玄關に行くと新聞が來てゐた。取り上げる中からパサリと落ちたものがある。黃色い、叔母をはるばる田舍から引つ張つた引力ある、帝國館の、赤い字で（大×××）の、でつかい〳〵、廣告であつた。

案山子

第三學年　久木八十八

百萬石の田の面守る案山子名は……

何と問へどもあらず、綠三寸の苗代より……

黃金色の千波萬波、よせてはかえす出來秋に到る迄？

櫛風沐雨そも幾日ぞ、功績くちずして、衣までやぶれ、秋風徒に弓箭をなぶりて、

群がる小鳥もおどろかねば、晩鳥笠にとまりて秋の哀を知りがほに、夕陽今し古城の松より斜に光を投ぐれば……

骨あらはなる案山子の影、地にひいて長し！

人はかがしを見て如何の感を起すか？

×

殘暑

朝顏の花にしつこき殘暑かな。

夏休み思ひ思ひの汽車に乘り。

寄宿舍に淋しき夏の机かな。

晩夏の夜

第三學年　柴田正己

炎熱やくが如き日中の暑さは漸く去り、やゝ涼しくなつたと思ふてゐる中に、やがて太陽は其姿を西に沒し、なごりを止めんと許り西の空を眞赤に染めてゐる。「明日もよい天氣だか日の入りがいゝ。」と誰だか話して通つた。川には水がいよ〳〵まして殘照を浮べ紺色の影をひたしながら漫々として一條の線を描きつゝ流れて行く。折から何處からの寺の鐘がボーン〳〵といかにも平和に鳴り響いて來た。その鐘の音に促されるかの樣に、烏がカア〳〵と鳴いて野の一方よりねぐらを指て飛んで行く。最早日はとつぷり暮れて邊りは物淋しく行きかふ人も稀になつた。四方の山は將に黑山と化し、眠るが樣である。一陣の淸風は輕き袂を拂ふ。未だ秋にもならぬに、虫の音の耳にすればはや秋の心地もする。帶の樣に長く引渡した天の川は更け行く儘に光が冴えて、無數の星は銀眞砂を敷いた樣に天に滿ち、其一つ〳〵が木々の葉に宿り、露と共に光りを放つ。あゝ涼しき眺。心地よき眺！　我はこの靜かな眺にぼんやりと空の一隅を仰いでゐると、ふと我が頭上の大樹がブル〳〵と身ぶるいした。その葉のすき間より月光のむらさめがもれた。それと同時にカラ〳〵と木の葉が一二枚淋しく地上に落ちた。もう其の後は何一つ物音がしなかつた。此の靜けさを破つて、何處かを流るゝ尺八の音色もいとしめやかに聞えてきた。あゝ！　晩夏の夜。この神秘的な

夜になんとよく調和した音であらう！　しかし間もなくこの靜かな音も絶えて何處かで戸を繰る音が聞え出した眠りを誘ふかのやうに。

秋

第二學年　橋本末藏

少しばかり身体にこたえる、涼しいと云ふよりは寧ろうら寒い風が吹き出した。ちゞくれた柿の葉が其の度毎に五六枚もはら〳〵と乾ききつた上に落ちて、ばさりと音を立てる。夏中深紅色の葉を飾つてゐた葉雞頭も、恰も霜にかゝつて枯れ果てゝ行く時の青葉の如く、其の美しい色合を失ひつゝ褪せて行つた。秋の氣分がやつて來た。泌み通るやうに悲しいやうな秋の氣候がやつて來たのだ。そうして又此の後には、すぐに寒い冬の日がきつと襲ふて來る事だらう。こんなに思つた時、暑かつたあの夏の日も過ぎ行く者と思へば或るうら寂しい懐しさを感じる。

夕方から宵にかけて、きまつて相當にきつい風が吹く。もうすぐ木枯にも變るべきあの風が、夏には聞く事の出來なかつた、冬の風の持つ獨特の不思議な音を立て出した。そうして木の葉のざわめき、取分け柿の葉のばさ〳〵と落ちる音にも何となく一種の悲哀が含まれてゐた。それはあの肌寒い木枯に吹かれて、身もだえしてゐる冬の木の、鳴き叫ぶ聲にも何處か似てゐる所でもある如くに思はれた。雨戸がゴト〳〵鳴る。壁の隙間からサアーツ〳〵と風が吹いて來る。外には雪でも降つて居るやうに、私の聯想は嫌な冬の上に及んで行つた。

毎夜湯が濟むと涼みの人も既になくなつた街上に出て、風に打たれる。まだ夜は早いんだが、もう涼みに出る人はない。風がサツーと吹いて來る。夏の風のやうな、なま溫(ヌル)い氣持の悪い風ではない。身体中の汗が一度にひいてしまふ。そんな風に快よく吹かれてゐる時、私は心の中までが淋しくなつて、もうすぐに取りかた付けられる。涼み臺に仰向けに寢そべつて、秋の空を眺めやつた。これが毎夜の事だつた。もうそんな時分には星もはつきりと澄み切つた空に浮び出てゐた。何處に一つの散り雲なきまでに澄み渡つた夜の空も、夏には見られなかつた一つの現象だ。天の川も大分白ずむで來た。

五六日も快晴の日が續くと、其の次には必ず雨がやつて來

る。しかし夏の日の夕立のやうに、雨の前が、いやに蒸暑かつたりはしない。寧ろシヤツの一枚も着たい程に、寒くなつて行くのが普通だ。そぼ〳〵と五月雨のやうな調子で降る。雨は止んでも曇つたまゝで日が暮れる。鬱陶しい夕暮の中に、夕餉の煙は軒端をくゞつて低く漂ふてゐる。身体が雨後の冷氣のために、ぞく〳〵して着物が身体に着いてでもゐないやうな具合である。夜に入つて、雨は又降り出す事がある。しと〳〵と温和しく何の音も立てずに降つてゐる秋の雨にも、又情味の深きものあるを覺える。

夜明ける頃には雨は、きつと止んではゐるが、其の邊一帶に朝靄が下りて居り、木の葉からは重そうに雨の雫が垂れてゐる。其の朦朧とした朝靄の何處かで、多分百舌鳥だらう、甲高い鳴聲を發した。あゝもう秋が來たのだ。鳥の聲にまで秋の氣分が混つてゐる。と突然目の前を鳥が飛んで來た。今の鳴聲の主だらう。それはやはり百舌鳥であつた。あの輕敏な身体を——高く——低く——波を描いて飛んで行つた。そうして又一しきりキキキー〳〵と絹を裂くやうな聲が聞えた。私には百舌鳥のあの敏捷な姿や尻尾をピコ〳〵振つて居る姿が想像出來た。

自分でも氣付かなかつたが、ふと鼻から出る息が白く見えた。私は「寒くなつた」と感じながら、物好きに何度も〳〵ハア——ハア——とやつては息の口から出る樣を見てゐた。半年の餘も見る事が出なかつたんだもの。それにも私は一種の懐しみを感じたのだつた。

思ひ出

第一學年　東辻清彌

僕は淋しかつた。校庭を見ても青空を眺めてもおさへきれぬ淋しさがあつた。「倭夫ちやん手紙を時々ちようだい」何時も手を握り合つてゐた友人、僕にとつてはなくてはならぬ友人だつた。

別れの日は來た、友は今日が最後の見納めだと言ふが如くに僕の顏を見つめて居た、僕も友の顏に視線を集めた、やゝしばらくして僕の視線の焦點がぼやけて來た。ポタリツ……にぎり合つた手の上に暖いものが落ちた。

泣いて居るのだ二人共……

其の夜友人を送りに驛へ行つた。

驛へ……

笑聲が聞える、あゝ笑つてゐる。

僕はその人たちと異つて淋しさの爲に泣いてゐる、胸の中はにえ立つてやけるやうに熱かつた、やがて顏が熱くなつて來て何時の間にか涙が頰をつたつた、プラツトホームへ出た友の周圍には人々が集つてしきりに話をして居た。

僕はかきわけて中に入つた、友は僕の來たのを見ると飛びついて來た、「もう歸るのだね」と僕は今更のやうに訪うた。

「うん」友人もうなだれて居た。ポタリツ……乾いたコンクリートの上に涙が落ちた。

涙が落ちた泣いてゐるのだ……

泣いてゐるのだ二人が……

他の人はたゞ僕等をかこんだだけだつた、たゞ默々として二人は下をむいてゐた、ゴーツ、汽車が來た、はつと僕は顏を上げた。

友人は汽車のまどから首をだした、さやうなら〳〵の聲であたりはざわめいた。友は東京へ去つてしまふのだ……「しづをちやん君はほんたうに幸福なのだらうか、又僕はほんたうに不幸なのだらうか、いゝや二人共幸福なのだ、僕は僕の思ひを果し友は友の思ひを果したらよいのだ東京がなんだ彥根がなんだ二人共立派な幸福者だ」僕はがくぜんとして叫んだ。

しゆんかん汽車は動き出した。さやうなら、僕は聲がでなかつた、終に萬歲……とさけんだ、僕の幼稚な頭には間接にでも友にさはりたかつた、僕の手は列車にふれた僕の体は前にのめつた、あツ……」

僕は聲をしのんでないた、汽車は去つた。僕は飛ぶがごとくにプラツトホームからでゝ、やにはに自動車に飛びこんだ。

この僕の悲しんだ出來事は今から三四年前の事である。今でも友の姿が青空をながめて居ると、ふうわりと頭に浮んできます、又その度に樣々のロマンスが作られてはこはれます。

友よ！幸多かれ……

秋の彼岸

第一學年　居長賢藏

午前の日は氣持よく二階にさし込んでゐる。

御坊の松の木の上を鳩の群が樂しさうに又身輕に二三回飛んですうーと下りてきた。今日の彼岸を喜んでゐるのだらう。

母は今朝お寺參りをした。

僕は机によりながらぼんやり窓の方を眺めた。窓からは御坊の松、御堂等が見へる。これ等は初秋の日を浴びて喜の色を湛へてゐる。

さて彼岸とは！　祖先を祀り申すといふ事を少時知らず知らず耳に入れた。多分其の事だらう。

佛を祀るといふ精神は、日本人特有の精神で、又日本人の美德の一端である。

聖德太子の頃より起りし神佛崇敬の精神が、一六五〇年間壞れず汚れず完全にこの昭和の御代まで傳りし事は、誠に我々日本人の尊敬心の根强き所であると思ふ。

彼岸中日即ち秋季皇靈祭には我が全國の學校・會社・商店等あらゆるものが業を中止して先祖に御見舞申し上げるのだ。

僕は今更の如く敬服した。

あゝ發車の音

第一學年　居長賢藏

僕は走り續けてゐた。

大通りに出た、何だか汽車がついたようだ、驛の方からぞろ〳〵と學生等がやつてくる。……

「あゝしまつた？」事實だ、汽車が着いたのだ。柵の向ふに列車の一端が見える。

如何しよう！

郵便局の邊に來た。發車の汽笛は音高くなつた。

「殘念だ」——熱い涙がぽつり鞄の上に。

一先づ驛へ來た。場內は森閑として誰一人ゐない。待合所の一隅の椅子に腰を下した、同時涙は雨の如く！　口惜しかつたのだ、いや學校の事が思はれたのだ。

何時までも立去る事が出來なかつた。

ぼんやりと外を見るだけだつた。人・家・木・犬・馬等あらゆるものがぼんやりと見えた。

僕の心では解決することが出來なかつた。先づ家に歸る事にしたが、歸るのはつらい〳〵何といつてもつらい。——

「仕方がない」かへらう——

我家に來た。閾を踏まんとした時、無量の感が我胸を襲うた。

（完）

詩藻

特別會員　大和田清朗

五月我校依例催端艇大會於
港灣盡日雨降

連日湖東雨若絲　艘々爭覇躍蛟螭
弘安快史君知否　赤鬼鬚風常在茲

五月同人相携小會于天寧寺
醉餘戲作

細雨新晴新綠鮮　菜花麥浪更嬋娟
卅餘羅漢醉如泥　杜宇驚啼斯俗禪

關ヶ原懷古

膽峰突兀拱川横　一路指東魚虎城
濃尾平原三百里　惜哉治部不知兵

夏興　小庭有大樹稱泰山木故云

泰山爲大蔭　涼味自茲來　却喜稀賓客　詩成拂硯埃

又　湖畔散策

默々如溪石　終生守此愚　蹣跚孤出戸　眼界發晴湖

又　湖畔小亭

欄外漁舟過　奇峰落碧潭　貪涼吾獨在　柳蔭釣翁耽

又　浴後

省吾常守分　交世故平凡　浴後多涼味　輕衫月影銜

又　湖畔獨酌

柳邊涼雨過　天外一帆還　汀上横瓢睡　斯心不易頒

又　雨後見虹

晚涼生水角　霎雨過山尖　擧手稚兒喜　彩虹對岸瞻

彦根城懷古

城鐘潛怪鬼　嶮閣秘雲虬　前櫻田門變　誰曾對此侯

秋夜

讀書窓外雨疑蟲　滴々無風聽落楓
夜半衾寒眠復醒　秋聲更在露華叢

詩

日本青年の歌

第五學年　泉泉　堯仁

（一）

神統二千有餘年　輝く稜威いや高く
國威さながら高潮の　機運うづまく大御代に
生れし吾等青年の　大いなる幸重き責め。

（二）

清高富士に恥ぢざらむ　優美は競へ櫻花
崇き理想は天つ日の　み空無限の大道を
さしのぼるごと大君の　大き聖勅に輝けり

（三）

萬里四海の波寄する　太平洋上嚴として
世界に臨む大使命　はたすは誰ぞわく潮に
進取自由の意氣あがり　渾身若き血ぞをどる。

（四）

剛健質素堅忍の　志操雄々しく奮ひ立ち
正義と愛を貫ける　祖國獨自の新文化
創造の道あやまたず　稜威と共にいざゆかむ。

生存

第五學年　辻三雄

人間がもし二つの生命をもつてゐたら
自分は初めの命をどんなに使ひ
第二の命をどんなに終らうかしらん？

併し自己の生命は唯一つであるから
運命の玩具にされる
種々の事に惱まされる……

種々の事に感じる……
種々の事を考へる……
だが凡て喜劇である。

道義の觀念が衰弱した人が
妄りに踊り狂ふとき
生存の舞臺を踏み外して悲劇を起す。

悲劇を見た人々は驚いて
自己の舞臺に繩を張つて
踏み外すまいと努める
繩を張り損じた人はそれがために困しむ
繩を張る事を敢てしない人は
三面記事に出る。

繩を張つてゐる人の多くは
繩を張らない人と張りそこねた人とを冷眼視する。

冷眼視されたる人々は

多面なる人生の奥妙に觸れんとして
痛ましくもうるはしき人情と
千古不變の眞理との間に
閃々たる光を瞥見して彷徨する
可憐なる存在である。

道義の繩を張れる人々は
自己の眼前に展開されたる新生面に向つて
種々の生活を始める。
彼等の中には絶對に不平を感じない者がある。
自己の影を追求して焦る者もある。
自己の快樂を主題として生活する者もある。
人生を緩慢に押流されてゆく者もある。
併し
生存を意義あらしむる根源は歡喜である。
さうして
最後は全我の働きが
唯「虚」を包むだけだ。

罪の子

第五學年　廣田萬祐

俺は今日も一人
つくねんとあの岡に立つてゐた
風が草をならした
俺はぼんやりと
あいつの事を考へてゐた。

今日出る船にアメリカへ
あいつは
もう二度と歸らぬだらう

早や半年になる
その日
あのおどけた樣な瞳に
涙が光つてゐた

誰が見たか
あの涙を……。

無邪氣な人の好いあいつは
アメリカへ行つたのだ
たーれも知るまい
あの淋しい心

罪の子は
もう再び歸らぬだらう

誰があいつを
罪の子にした

なぜ弱きものは去る

風は冷たかつた
俺は一人
大聲で叫んだ
罪の子よ

呪ふ勿れ人の世を
すべてが運命だ

夕立

第五學年　西崎勝之助

古びた古びた
小諸なる城のほとり
雲黑く我等は悲しむ
綠なす窓外の竹藪
深い風に荒れてゐる
大空は走る
夏の眞中
又々、狂亂が起つたのだ
ガラス戸が鳴りひゞく
誰が此の運動を
號令一喝、やめさせやうぞ。

○分列式

小雨降る地上を
重たい鋼鐵の機械が通る
それらは雨粒をはねとばし
さつく、さつく、さつく
がちやり、がちやり
青い炎の中を
默然と過ぎ行く
頭、右！
寂しい、暗い、地を
俺は踏んでゐる。重く踏みしめてゐる。
疲勞？　困惑？　不感!!
惱める靜寂。

思ひ出の歌

第五學年　淺島希一

一、嗚呼思ひ出す五年前　　大正十五の春卯月

微笑む父に連れられて　希望に滿てる心もて
校門くゞりし其の頃の　姿ぞ胸に蘇れ
二、散り敷く櫻打ち眺め　荒神山の頂に
晝餉のむすびほゝばりつ　友と語りし頃ほひも
思へば果敢なき夢なりき　再びかへらじあの頃は
三、凍てつく氷ふみしめて　マントの襟も高々と
通ひし稽古も夢のごと　夏は淼々たる水邊に
將又嶮しき靈山に　活躍したりし思ひ出は
四、樂しき旅行汽車の旅　西に東にテク〳〵と
名所を訪ね見學し　身体鍛へし遠足も
其の思ひ出は盡きずして　そゞろに思ふ幾春秋
五、雲霞と紛ふ若人の　大軍團をみそなはす
若き天子の龍顏に　おぼえず流す一滴
雨中に立たれし御姿も　今は榮ある思ひ出に
六、去んぬる年の今頃は　まだ中々と思ひしに
早くも春秋廻り來て　やがて去り行く我々に
附く先輩の名稱も　淋しき弟等の土產なれ

＊　＊　＊

春の朝

第五學年　福田杲正

朝早く離床して門口に立つて
向ふ本道見る時に
カララ〳〵と山へ行く車は動く。

はるか上空見れば晴渡り
清くぼんやり山下に霞來りて！
おう、すみたる空の春の朝よ。

やがて向ひの家の戸は開きぬ
春のぼかんとした靜けさ破る
おう、敬愛なる哉春の朝よ。

一番のバス走り人動き
かくて靜寂なるは雜音と化し
人が耳をかすめ行く。

何處からともなく猫鳴き出で
田に行く百姓向ふ鉢巻
あゝ、何たる趣の春の朝よ。

童謠

第五學年　川那部一誠

金時さん　金時さん
赤いお顏が大好きよ
赤いお顏に黑いお目
黑いお目々が大好きよ
黑いお目々を白くして
おなべの黑をぴつかりと
光らすあなたのお目々こそ
ほんと、ほんとの金時さん。

＊　＊　＊

熱狂

第四學年　松宮實

薄墨色に曇つた空。絶好の野球日和だ。激戰の豫感がする！ グランドを取圍んだ幾百の觀衆。見よ！ 戰雲の低く垂れたる。只一つの目的に突進する幾多の英雄、今その鋭鋒を交へんとしてゐる。

鮮やかなユニフォーム姿、血と涙の猛練習を物語つてゐる！ 固い決死の色が溢れたその面。

戰の幕は切つて落された。平和は破れて戰亂の巷と化してしまつた。

選手の緊張裡に、そして觀衆の熱狂裡に龍虎相搏つ白熱戰だ！ カーン！ と音を立てゝ、秋の空に白線を引いて飛んで行く球、觀衆の視線を此の一球に集めて。

右に左に前に後に、輕やかに動く白き球兒、物凄い決死の意氣に燃えてゐる。

投げた、カーン！ 打つた、飛んだ、外野スタンドに。三疊打だ！ 拍手の爆發!!

ファンの手は固く握られて、汗！ 汗だ。狂人の如く熱狂してゐる。その時颯ッと吹く涼風。

一たび破られた平和なグランド、戰士の蹂躙に委ねられてしまつた。

努力奮戰！ 勝つたのだ、天は最後の勝利を與へ給うた。ほこりにまみれた薄黑い戰士の顏だ！

天にこだまする拍手の裡に、退場する凱旋の將士よ！ 果て知らぬ悅びの色が溢れてゐる。

見よ！ 雄圖空しく一敗地に塗れた將士を。打しほれて退場する。涙だ！

日は早や西空に傾いてゐる。一面の紅雲だ。そこに榮光と沒落の二つが蠢動してゐる。

戰の幕は閉ぢた。兩軍の蹂躙したグランド、再び平和の時を迎えたのだ。

泣け！ 敗軍の將士よ、他日の復讐を期して、喜べ！ 然し自重せよ、戰捷のナインよ

睡れ！ 安らかに、新なる夢を求めて、迚れ！ 夜のパラダイスだ。

はかなきもの

第四學年　松宮實

キ！ キ！ キ！ 秋の夜の蟲だ。やがて滅び行く哀れなものだよ、はかないものだよ。

重い〳〵頭を擡げかねて、鈴なりの柿の木だ！ 水つぽい感じに打たれる。

無心に物想ひに耽つてゐる僕の顏がみじめなものになつて浮んで來る夜だ。

涼しい瞳を閉ぢてすや〳〵と睡つてゐる赤ン坊の夢は樂しいものだよ。

何かのはずみにパツと眼を開いた。二時だ、深夜の闇を貫いて遠く汽笛が鳴つてゐる。

太陽が東雲を紅く白く染めて窓硝子にキラリと反射してゐる

清淨な朝

海も靑く空も碧い夏の眞晝だ、遙か地平線の彼方に、銀白に輝く一艘の帆船

田舍のやさしい横顏！ 時代のテンポに無關心な人力車が走

つてゆく。うすら寒い秋風の吹く田圃道に立つて、重げに垂れた黄金色の稲田に浪打つタ。

街頭

第四學年　岩崎助一

白熱の夏の光がぎら〳〵として街頭には人通も無い。
自分はどちらへ行かうかとアスファルト上に立つた。
屋根には雜草が水氣に渇いで喘ぐやうに萎びてゐる。
夏の夜は重くるしく人を誘惑するものゝやうに生温い。
熾烈な日光は草の根を襲つて道路の土に喰ひ入る。
一圓の葉卷とゴールデンバツトの吸殼が落ちてゐた。

○初　秋

〃秋は來る
太洋の浪の果から白雲の高原から
すが〳〵しい大氣は
天地の中に滿ちて
微妙なる秋のおとづれは
いづこよりともなく我等の胸に
響き來る。〃

○高原の牧場

〃金風爽々として
はるかなる草原を渡る
駿馬の群が悠々草を喰む
遠山の嶺の頂に白雲がおどる
楚々として風にたへぬ花が
白くうるんで泛ぶ
私は力一ぱい雲を食べた〃

歩み

第四學年　三輪隆造

空氣は重くどよんで動かない。
あたりはどんより濁つて居る。
單調な田舍道だ。
並木とたんぼと曇つた空。

その中を私達は重たい足を引きずりながら歩いて居る。
リュツクサツクが一足毎に私の肩をぐい〳〵と締めつけて、非常に痛い。
だが私達は歩く、牛の樣に。
なまぬるい風に、松脂の香がプーンと鼻をつく。
何だか心地よい氣がする。
ふと立ち止まつて、過ぎて來た方をふり歸つて見ると、
矢張り行手と同じ並木道が長く長く續いて居る。
私は唯譯もなく長い息をぐつと呑み込んだ。
そしてポケツトからキヤラメルを取り出してほゝばつた
そして又歩き出した。
ステツプ　バイ　ステツプ
ふと家を思ひ出した。
騷ぎ家の私の出た後の淋しいガランとした家が、チラツと私の頭をかすめる。
今頃家では皆んな何をして居るだらう。
そんな事を考へると、家がむやみに戀しくなつて來た。
でも私達の前には矢つ張り長い〳〵並木道が續いて居る
〃えゝつ　糞つ　馬鹿な
何が面白いもんかい。
何が樂しいもんかい。こんな苦しい事が……
私は何をしに此所まで來たんだ。
一体何の爲にこんなに遠くまで來て苦しんでるんだ。
馬鹿々々しい〃と
自分を嘲笑したくなつて來る。
希望を持つてやつて來た自分を笑ひたくなる。
だがどうしても今日の豫定地までは行かねばならない。
ふと……、雨が……
つかれた私の頰に〃ポツン〃とあたつた。
何だか雨が、甘くなつかしい氣持を懷かせる。
そして二三歩。
又一つ、雨が私のほゝをぬらした。
そして又一つ
又一つ……
私は今までの疲れをすつかり忘れてしまつて、
丁度夢の樣なあはい〳〵感じを懷きながら、
雨の並木道を歩く。
一歩。

一歩。
雨はます〳〵降つて來る。
その中でふと私は、
人生と云ふものが、
私達の此の徒歩旅行の樣なものではあるまいか、
初めは誰しも希望に滿ちみちて出發する。
だが途中の困難は多い。
今日の樣に雨の降る時もあらう。
風の吹く時もあらう。
暗夜道を行く樣な時もあらう。
又其の時一縷の光明をみとめて、
非常な喜びにうたれる樣な事もあるに違ひない。と
そんな眞面目くさつた事を考へ始めた。
ふと我に歸ると、
雨は大分小降になつて居た。
さあ、私も緊褌一番、頑張らう。
大地をどし〳〵踏みしめて歩かう。
行手の如何なる困難をも恐れずに歩かう、
もう目的地も遠くあるまい。

童謡

第四學年　名畑惣次

○人形
東京みやげのお人形
妹のおせなにをぶされて
波に笹船ゆら〳〵と
ただよふ樣に動いてた。

○ぼくの妹
いつもよくねる妹が
今日にかぎつて寢ないので
勉强すんで見てみたら
らくな夢路におちてゐた。

○小さな赤魚
うちの小池の子金魚が
私が顔を洗ふとき
私が洗つた其の波に小さな
小さなおひれをば
ひらり〳〵とうごかしてた。

空想

第三學年　竹内一

これは空想だから……
空想をして居る男があつた
男は飛行機に乘つてゐた
——いや男は空想してゐたのだ
男は富士の絶頂にあつた
——男は只空想してゐた
魚になればいいになあ
鳥になればいいになあ
——男は魚になつてゐた
男は鳥になつてゐた
彼がそれを思つた瞬間々々に
けれど男はそんな事は知らなかつた
男は只空想してゐた
自分が空想を止めた時の自分を空想してみた
——男は空想を止めた男になつてゐた
けれど彼は空想してゐたのだ
男は飛行機に乘つてゐた
——いや男は只空想してゐた
これは空想だから……。

空の風景

1
新しい星の匂ひ
あゝ　大きい太陽だな（春）

2
雲
太陽をさへぎつた
入道雲
古い幸福の
一かたまり——　（夏）

3
ポツンと一つとりのこされたやうな
星が流れた

地球の一角に立つて
誰かが　うめいた

地球の一角がボロボロと
くずれ――かけて

宇宙のどん底へ
どん底へ
（ポツンと一つとりのこされたやうな星が
地球の一角を無慘にも）

おゝポツンと一つとり殘されたやうな
星――永劫の未來　（一九二九、一二、三一）

就床

第一學年　西村英男

夜は更けて行く
コチ〳〵といふ時計の音

シユ〳〵と走るペンの音
時たまコト〳〵と鼠の音
外には何の音もしない

夜は更けて行く
唯電燈の光と月の光
電燈を消せば氣味の惡い
青白い月の光
僕は寢よう！

今日の疲れの
恢復の爲めに！
此の時
或る一種の淋しさを感じた。

※　※　※

俳句

青空

第五學年　淺島希一

青空や　とび鳴く聲す春間近
すうすうと　過ぎゆく水の　面白さ
七ばけの　花咲く宵の　螢かげ
日毎々々　ぶら〳〵　暮す　野球月
夕涼み　瞬く星の　かげかそか
小屋の燈を目的てに登るうねり坂
飛ぶ飛沫　躍る河童や　畫下り
兩側に　並ぶ浴衣や　橋の上
くつきりと浮き立つ伊吹涼しさう
ちぎれ飛ぶ　雲の肌へに　朝日映ゆ
一抹の　淋しさ覺ゆ　五學年
額つきて　想ふ昔や　師の御墓
ジージーと　ひねもす續く　蟬の聲
夏休み　過ぎて別るゝ　日ぞ近き
明星の　瞬きに　暮る　鏡山
一しきり　降り來る霧や　膽吹山

雲の峰

第五學年　松岡孝治郎

片街や　下駄音高し　雪の宵
雲の峰　亂れた今日の　暑さ哉
落人の　心を知るか　秋の風
血にはれた　蚊の止りけり　朝の壁
栗のいが　はじく響よ　山の奥

雜詠

第五學年　福田杲正

寒き夜に灰掻混ぜて雜話かな
淋しくて話相なき夕かな
花散りてわびしさの増す節句の夕

犬

第三學年　竹内一

雨降る日又も今朝來し友の聲
雨はれてのそのそ去れり迷ひ犬
吹雪して ふと亡き犬を思ひ出づ
雪はれて墨の色濃き試筆かな

雜詠

第一學年　西村英男

おゝ寒い西の空には殘月が
めだか取り尻からげする子供かな
畦道や いなご飛び立つ黄金の波
木枯や雀むらがる熟し柿
ちよろ〳〵とナイヤガラ作る田川かな
烏行き日はいまだでず月白し
青大將そろばん橋で川渡る
舞うて居る赤いおしゝがしでふつて
初日の出烏と共に日は昇る

× × ×

短歌

わびしさ

第五學年　松岡孝治郎

再びは踏まじと言ひし故里にかへりし夢ぞ覺めて淋しき
木枯しは吹かで村里靜かなり藁家の上に星一つ見ゆ
言葉なく別れし友が偲ばれて瞬く星に幸を祈りぬ
懐しき友の書をば待ちあぐみ門にて待てど今日もなかりき
朽家をば照らせる月のかそけさよ破れた壁に蟋蟀の鳴く
荒れ果てし厨にすだく蟋蟀の聲の細さよ秋はふけたり
若芽萠ゆ春の丘邊に影落し空飛ぶ鳥の羽音輕し
早くより咲きて驚待つ梅の梢の一枝雨に禮せたり

遠吠の止みて淋しき眞夜中に落葉カサ〳〵地をころびけり
信じゐた友の仕打が悲しかり小暗きふすまぢつとみつめき
再會を期するすべなく別れたる友が慕はれ名を呼びゐたり

雜詠

第五學年　淺島希一

久方の朝日に匂ふ櫻こそ我が國民のかゞみなりけれ
朝霞棚引く彼方ほの〳〵と眞白き帆影見え隱れつゝ
水の面に垂れ下りゐる松ケ枝に朝日のさして玉ぞ散りける
遠方の一叢櫻咲き出でゝ野山も霞む春は來にけり
かすかなる川のせゝらぎ聞ゆなる田の面に白く置ける白霜
淙々と流るゝ川邊ロ漱ぐ背筋に涼し谷津微風
赫々と燃ゆる松明ふりかざし岩間越え行く村の若人
頂に輝く小屋の燈火を目的てに進む十六夜の晩
つくづくと來し方眺む御幸橋愛知の川原に河風ぞ渡る

新聞

第三學年　竹內一

新聞にのりたる事の何もかも嘘つぱちだと知れる今日なり
ぐいぐいと水は飲めども口の中に未だ藥の味は殘れり
かくまでも約束といふものを輕んずる友の心の憐れなるかな
揚子江廣き河口の水の如滿ちて溢れる我が想ひかも
あらしだらうと思はれてこの夜にはる〳〵來る人のこと思ふ

秋の夜の學

第一學年　居長賢藏

こほろぎの鳴きつる方は何處なる夜のまなびの我はさびしき
水の音の去さり行く所は何處かな夜のまなびの我はさびしき
たれかきて學びの友にならないか夜のまなびの我はさびしい

行紀文

河内に向ふ

第五學年　山本可人

東雲のうす紅色に染まり、清き朝の日影萬綠の自然界に呼びかけんとす。涼風颯々として河堤を洗ふ、木陰にたゝずみ友を待つ。半時許りにして友來る。朝の禮を交しつゝ河堤の涼風に送られて目的地に向ふ。

地は程よく濕り、虫の音はチリ〳〵と銀鈴を振るが如く、靴音勇ましく虫の音に合奏する。

河堤盡くれば茫漠たる新綠の自然界眼前に展開せられ、田圃靜かに波打ち、涼氣多し、歩む〳〵平凡なる、うねりくねれる道を、里人の町に物賣りに行く急がしげなる樣、車の音カラ〳〵と聞ゆ。歩むに從ひ、日は次第に高く輝き休はやゝ汗ばむ。

何時しか田圃道盡き果て、樹木相しげれる小山を左手にサラ〳〵と流る間餘の小川を右手に勇壯なる軍歌を歌ひつゝ行く。遠山は淡灰色の靄一面に立ちこめ神靈の氣滿てり。

里人に道を問ひつゝ行くこと里餘、芹川上流に到達す。平凡にして、高き山に挾まれる一大峽谷にして溪流勢ひよく流れ來たり白く碎け、他岩に當りて亦くだけ、流れ渦卷きて絶えざる鬪爭の如くである。山家は木々の間に散在し雞聲聞ゆ。此の如き所續くこと二十餘町、村の鎭守の森に到る。

社殿はくち古び神嚴自から身にせまる。山風林樹に動かし天空に樂を奏し、河いと近ければ涼風四面より起り、清爽一氣暑熱を知らず。

社前にぬかづき晝食を取り洞穴に行く。友來りて案内す。社殿の後ろを廻り、やゝすれば流聲ゴー〳〵と聞ゆ、越地潟なり。急ぎ到りて顏を洗へば水、氷の如く涼味掬すべし。

丸木橋を渡り、河にそひて行くこと二町、洞穴の入口に來る。入口、小なるに茫然たり。然れども冷氣白煙の如く濛々として中より出で、寒氣を感ず。友により陣松明に火點ぜらる、周り二尺とも思はるゝ陣松明、パチ〳〵と紅舌をはく。

友を先頭に脊をかすめて内に入れば、こはいかに其の壯大なること筆舌に盡くし難し。底知れざる天井。峨々たる岩、亦はサラ〳〵流る水聲將に洞穴の精の奏づる樂の如く數分間たゝずめば人をして地下の世界に導く如し。ゴロ〳〵ところがりたる石づたいに梯子を渡り二階に到れば、稍々小となる更に進み三階に到れば人体からうじて立つを得。此れより脊中を打ちつゝ二三町行けば人跡なく。恐怖と心配の念に滿され、自づとキビスは廻る。然れども友の保證により。最後をつきとむればドンヨリとしたる深淵横たはりて指路をふさぐ。此處こそ河内少年によりて探險せられたる最後の地點にして、此處に到る迄一所として立ち得る所なし。「昭和五年八月十四日此處に來る」と記し。逆道す。外に出づれば暖氣面をおほひ寒國より暖國に來し感あらしむ。多くの見學と、印象とを殘して再び社前に來り、次第にくれ行く天を仰ぎつゝ夜の支度す。

日トツプリと西山に入り、蚊の音ブン〳〵と聞ゆ。天幕の内にて一本のロウソクを便りに、罔兩なる話は、はずみ、何時床につくとも知れず外は駸々とふけ行く。

南國の旅

第五學年　松岡孝治郎

六月二日　第一日

夕闇の裡にうすれゆく山影に汽笛の音が反響(コダマ)しながら脈々として消滅していつた頃。最後の旅情を滿喫すべく躍る心を深く秘めた大凡百名の若人を乘せた列車は靜かにすべり出した。——吾等は懷しき故郷を包む闇を透して、淡く輝く古城の白壁にしばしの別離を告げ、新らしき旅への第一歩を印したのだ。——憧れの未知境に思出の足跡を深く刻すべく、友は皆淡い興奮を感じ、色づいた顏を希望に輝してゐた。

限りなき愛慕の絆で心を惹かれる。故里の表徵たる金龜城が夜の幄の裡に吸込まれる樣に消失していつた頃、車煙早くも犬上河原に棚引いてゐた。早稻の青葉の蔭より生じてくる微風を排し、重く垂れ籠めた幄を劈きながら列車は驀進に驀進を重ね、林影をくぐり、山影を貫きひた走りに走り續け、野洲、安土も車窓一瞬の間に後方へと姿を沒した。夜汽車の旅の無聊が輕くきざしてくると歡喜を全身に傳へ躍り狂つて

ゐた血潮も漸次平調にかへり、喜びと憧憬との交錯で頭部深く押し込められてゐた睡魔は眼底に強く襲ひかゝり、吾等を樂しい夢路に引入れた。若人の心を唆る史蹟を豐藏する攝津平原も夢現の裡に打過ぎ、歡樂境大阪の夜氣を強く震動させながら、足も輕げに梅田驛頭へ突入した。

華かな大大阪の夜を飾るイルミネーションを後に闇の中へ姿を搔き消して行つた列車は間もなく六甲山麓を過り、やがて、囁き合ふ樣に明滅する燈火の神戸に車休を現はした。

沈默を守る暗黑の底で微かに蠢く波の音に須磨、舞子の白晝の美景を偲び、一吹の笛聲で明石にさらばを告げ、夜半の姫路に着す闇の中で靜かに憩ふ白鷺城を思ひ浮べながら、先輩の探勝の跡に一抹の嫉妬心の湧くのを感じながらも、名殘を振切つて突進を續ける。

同　三日　第二日

岡山を通過後暫時して、川邊の流れに架した鐵橋を渡る騷音に、旅床の最初の夢は破られ、第二日目が淸々した晨氣に乘つて訪れて來た。東天に輝く太陽は既に初夏の淡き陽脚を靜かに車窓に偲ばせてゐた。

瀨戸の絕景は、我等各自の賞美の儘に委すが如く多種多樣な自然美の姿態を我が眼前に橫へてゐる。――千古の神秘を秘めてゐる水、その碧水に岩脚を浸して亂立する奇岩怪石、その間に帆影を浮べて走る白帆、海上遙か彼方に浮ぶ島々黑煙を投げかけながら走る黑船、黑煙を橫に吹靡せつゝ海波をけつて走る軍艦の雄姿等、一岩一掬の水に至る迄多大の詩趣を持つて迫つてくる。

列車は右方近く崩ゆるが如き新綠で迫つてくる山肌に白煙を吐きかけながら、汀で狂ふ白波を左窓下に、なをも歩を續ける。寸尺間と所變ずれば、千變萬化する絕勝に心をときめかしてゐる裡に列車はとくと驅け、宮島驛に到着した。車を捨てて、暫時歩行の後我等は汽車に飽き勞れた躰をば連絡船に托した。

秘密の扉を固く閉じた靑山を左右に見つゝ、その山脚を太古より變はらざる音調で洗ふ藍水に船影を落しながら嚴島へと舟首を向け、細波を驅りながら進んだ。半刻の後朱の大鳥居に迎へられて嚴島に上陸す。日本三景の一に自己の足跡を殘すのだと思ふと、躰内に溢るる歡喜は、自づと力强き歩調をとらし、踏みしめる足先にも歡喜の渦が卷いた。

陽にまぶしく輝く海濱に沿うて行く事小半刻にして、神社

に詣づ。白衣に身を纏うた敬虔な神人に說明されて社內を一巡す。巧妙を極めた鏡ヶ池の不可思議さに好奇の眸をみはりながら同社を辭す。境內を彷徨ふ神鹿の群に無限の親しみを覺えながら、土產賣の喧騷な聲を足早にくぐり、再び船に投じうすれゆく朱の大鳥居に來るべき日の再會を約して、別れを告げた。

疲勞の充滿した躰を車の一隅に置き再び目的地へと辿りの歩を早めた。

打渡る波の牙を遮つた彼方に烟霞にうすれた憧れの目的境の九州の橫顏を眺めると、自づと元氣が滲み出て、數刻の後には眼前に展開される筑前の山川草木を偲んで幸福の泉に浸つてゐる裡に、列車は何時の間にか我等を本土の南端下關へ吐き出した。

市內を各自思ひ〳〵の印象として收め、多數の乘客の群と共に關門連絡船になだれ込んだ。船は夕風の海上を白玉を飛散させながら、種々雜多な船の間を縫うて走り、我等を九國の北端門司に流し出した。

黃昏の淡い光の漂ふ門司驛頭を發し、鎭西の野に盡きざる思出の第一歩を印して、奧へ〳〵と突き進んだ。八幡附近の空氣に觸れると、さすが九州の心臟部だと諸される烈しい活氣が充ち滿ちてゐて、機關の音は鼓動の如く響き渡つてゐた。

此の頃より、雲脚亂れ一天搔き曇り、氣味惡き暖風は天候の險惡を告げ渡り、今にも雨脚が訪れて來さうな闇の世界となつた。列車が漸く寶滿山麓に差しかかつた時遂に雲間より雨は降りかかつて來た。

煙る樣な雨は音もなく車窓に玉を結ぶ。我等は燈影に輝く雨玉の車窓越しに、異國情緒に浸つてゐると遂に福岡驛に着した。

我等は直ちに町の一隅に建つてゐる旅館に身を落付け旅裝を解いて、散策に打連れだつて出た。

博多！　何とさびれた町だらう。幼い時より博多の名を吟むと、云ひしれぬ無限の懷しみを感じたのに、現境地に臨んでは無限の裏切られた悲哀の苦杯をなめた。此の悲哀のわびしさを遁れ樣と焦り、幼時耳にした儘の音調で、心の中で博多！　博多！　と呼んで見た。併しそれは所詮無駄な努力に過ぎなかつた。幾ら呼べども叫べども幼い時描いた博多の町は少しも心中に蘇つて來なかつた。そこで博多人形の買物に心の淋しさをまぎらかしながら、宿に歸り、假寢の夢を結ぶ